

## 「英語文学」の授業展開に関する一考察

### —シェイクスピアの取り扱いについて—

佐々木 隆

#### プロローグ

昨今は実用英語重視のため、文学離れが起きている。大学のいわゆる英語の授業は TOEIC 等などの実用英語を意識したものが重要視されるようになってきている。また、これを推し進めている大学への補助金でもネイティブ教員以外による英語だけの授業、TOEIC 等の受験への支援、Academic Writing のような授業開設が対象となっている。国自体がこうした対応をとっていることも実用英語を推進している一端を見ることができる。

実用英語は日本の英語教育史を紐解けば、幕末の福澤諭吉が自身の語学力を試すために横浜を訪れた結果、蘭学から英学に方向転換した、いわゆる「英学発心」が思い出される(福澤 81)。実用英語はよく教養英語と対して論じられることがある。文学を教材にした英語教育は教養英語の代表的なものだ。この実用英語 VS 教養英語は渡部昇一・平泉渉の英語教育論争(1975)として大きな反響があったことは周知の通りだ。2000 年以降、「21 世紀 日本の構想」(2000)、『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』(2003)でも実用英語が中心となった英語教育政策が叫ばれたことは記憶に新しい(佐々木 a 24)。

専門科目としての「英語文学」では英語文学の代表とも言える「シェイクスピア」を取り上げるのはむしろ当然のことである。筆者はこれまでシェイクスピアやシェイクスピア作品を取り上げた英語文学の授業展開の報告を発表してきた(佐々木 a)(佐々木 d)(佐々木 e)(佐々木 g)(佐々木 h)(佐々木 i)(佐々木 j)(佐々木 k)(佐々木 l)。シェイクスピアを授業で取り上げることでどのような効用があるのかここでは論じたい。

## 1 英語と英語文学

英語文学のシラバスでは、英語と英語文学の関係について簡単に触れておく必要があるだろう。

第1回目 オリエンテーション。英語圏文化と World Englishes について

第2回目 英語文学とは何か（英語文学シラバス）

言語と文学の関係については配信教科書にて次のように提示した。

言語と文学の関係は切り離して考えることはできない。英米文学という場合には英文学（イギリス文学）と米文学（アメリカ文学）の総称というのが一般的な解釈である。しかしここで言う英米とは国名を指していることになる。しかし、言語と文学が密接なかかわりを持つ以上、英米文学と言う場合には英語で書かれた文学という大きな枠組みがある。日本の英語教育においてもイギリス英語、アメリカ英語が文法や発音、さらには綴り字が異なることからその取扱いが微妙なところがあったが、すでに World Englishes という考え方により、コミュニケーションとして成立することに主眼が置かれるようになった。文学においてこれまで「英米文学」とした場合には英語文化圏において英語で書かれた文学が取り扱うことができないという事態があった。アイルランド、インド、カナダでは公用語が複数あり、その中に英語が含まれている。オーストラリア、ニュージーランドなどもオーストラリア英語、ニュージーランド英語とも呼ばれるが、こうした国にももちろん英語で書かれた英語文学がある。今回の変更により英国、米国という国というより、あきらかに英語という言語を中心に考えた変更である。象徴的なこととしてジェニー・ストリンガー編／

浦谷計子他訳『オックスフォード世界英語文学大事典』(DHC、2000年9月)、上田和夫他編『20世紀英語文学辞典』(研究社、2005年11月)、木下卓他編『英語文学事典』(ミネルヴァ書房 2007年4月)の出版もある。(佐々木 g 11)

また、英米文学ではなく、英語文学とした点についても、ボブ・ディラン(Bob Dylan, b.1941)が2016年10月にノーベル文学賞を受賞したことを含めて、英語で書かれたものが総称として「英語文学」と捉える風潮となっていることを筆者は以下のような背景があるとも指摘してきた。

横山幸三監修『英語圏文学—国家・文化・記憶をめぐるフォーラム』(人文書院、2002年5月)、木下卓・窪田憲子・高田賢一・野田研一・久守和子編著『英語文学事典』(ミネルヴァ書房、2007年4月)、風呂本惇子・松本昇編『英語文学とフォークローア—歌、祭り、語り』(南雲堂フェニックス、2008年12月)、木村茂雄・山田雄三『英語文学の越境—ポストコロニアル／カルチュラル・スタディーズの視点から』(英宝社、2010年4月)、栗原裕『英語文学論』(開拓社、2011年10月)、菊池繁夫・上利政彦『英語文学テキストの語学的研究法』(九州大学出版会、2016年3月)、鈴木秀一・江藤章能『授業力アップのための英語圏文化・文学の基礎知識』(開拓社、2017年5月)など、英語で書かれた文学という観点から研究書もすでに出版されているところである。しかし、いずれにしても英語文学の中でも英米文学が中心的なものであることは変わらない。(佐々木 g 12)

ジェニー・ストリンガー編／浦谷計子他訳『オックスフォード世界英語文学大事典』(2000)の原書タイトルは *The Oxford companion to twentieth-century literature in English*、上田和夫他編『20世紀英語文学辞典』(2005)の英語タイトルは *The Dictionary of 20th Century*

*Literature in English* である。通常、〇〇文学と言う名称はその文学が書かれた言語により分類されることになる。しかし、英語を母語とする著者が増えてくると、言語だけでなく、著者の国籍なども含めて〇〇文学と表現するようになってきた。イギリス、アメリカ、オーストラリアをはじめ、英語圏が広がることにより、単純に言語と国による分類も難しくなってきた現状がある。まさに、World Englishes である。過去においては、例えば、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の場合にはアイルランドのダブリンで生まれたが、教育等はイギリスのオックスフォード大学で受け、その影響が大きくロンドンでの活躍していたこともあり、イギリス文学の中で論じられることが多かった。同様にジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745)、ウィリアム・バトラー・イエイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) 等も現在では、アイルランド文学の中で論じられていることが多くなっている。アイルランド文学という分類が今でこそはっきりしているが、当初はイギリス文学の中で扱われていた。同様にアメリカ文学についても、イギリス文学の支流としてまとめられていた時期があるが、現在はアメリカ文学は独立して論じられている。現在では必ずしも英語で書かれた文学 (*Literature in English*) であるからということに関係なく、著者の国籍や文化的な背景などを踏まえてアメリカ文学、アイルランド文学として扱われるのである。ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロは日本で生まれたが、現在ではイギリスで教育を受け、そこで生活しイギリス国籍である。発表している作品も英語で書かれている。

文学表現と言語の関係は決して無視することができないが、ここに国という分類範疇が加わるとさらに複雑化してくる。Jenny Stringer, editor. *The Oxford Companion to Twentieth-Century Literature in English* (1996) の “Editor’s Foreword” には以下のようにある。

The aim of this book is to present an overview of literature in

English from 1900 to the present day in a single volume. Re-presenting as it does all geographical areas of the Anglophone world and a wide range of writing, *The Oxford Companion to Twentieth-Century Literature in English* is intended to be read for pleasure as well as being a useful source of information to students and teachers of literature. Its scope extends from the United Kingdom, Ireland, and America, to Australia, Canada, New Zealand, Asia, Africa, and the Caribbean. (Stringer vii)

こうした言語と国との関係に加え、“literature”をどのように考えるかも新たに加わった。その象徴的な出来事がボブ・ディランのノーベル文学賞受賞である。“literature”には次の様な意味がある。

- written artistic works, especially those with a high and lasting artistic value:
- all the information relating to a subject, especially information written by experts:
- printed material published by a company that is intended to encourage people to buy that company's products or services; material that an organization publishes in order to persuade people to agree with its opinions: (Cambridge Dictionary)

単純に“literature”＝「文学」ではないことがわかる。

## 2 教職課程が求める「英語文学」の到達目標

2019年度より教職課程、すなわち教員養成課程が大きく変わった。教職課程の求める「英語文学」を「②外国語（英語）コアカリキュラム対

応表」から確認しておきたい。

全体目標：英語で書かれた文学を学ぶ中で、英語による表現力への理解を深めるとともに、英語が使われている国や地域の文化について理解し、中学校及び高等学校における外国語科の授業に生かすことができる。

到達目標：

- (1)文学作品において使用されている様々な英語表現について理解している。
- (2)文学作品で描かれている、英語が使われている国や地域の文化について理解している。
- (3)英語で書かれた代表的な文学について理解している。

ここで注目すべき内容は「英語で書かれた文学」との表現である。英米文学とはなっていない点である。「教科に関する専門的事項」として「英語文学」があるが、旧課程では「教科に関する科目」として「英米文学」が設定されていた。すなわち、これまで“English (British) and American Literature”と表現されていたものが、“Literature in English”となったと考えてよいのだ。これは「英語で書かれた文学」という考え方になる。これには以下のような考え方が成立するだろう。

- 1 英米文学をはじめとする英語文学
- 2 日本文学をはじめ、英訳された文学
- 3 文学をどう考えるかによるが、英語で書かれた文芸作品、文章とにまで広げることができる。

もうひとつ注目しなければならないことは、「(3)英語で書かれた代表的な文学について理解している」である。これは単に英語文学史（英米文

学史)を教えるのではなく、代表的な文学作品又は代表的な文学者を取り上げることを意味している。シラバスをどのように作成するかにもよるが、少なくとも英語文学においてシェイクスピアは代表的な人物である。シェイクスピアの名を知らぬ者はいない。シェイクスピアの作品を扱えば、(1)～(3)はすべて包括するようになる。語学の授業でないが、シェイクスピアの名台詞は作品と独立しても十分に扱えるものだ。筆者は授業科目「英語文学」(「英米文学史」)では、以下の作品を特に取り上げた。

#### 『ヴェニスの商人』

- ・テーマとして“Appearance and Reality”を取り上げる。
- ・3つの箱選びのシーンでの台詞を紹介。

#### 『ロミオとジュリエット』

- ・バルコニーシーンに絞って、同一場面の複数の映像を利用しながら、紹介した。

#### 『リア王』

- ・領土分割のシーンに絞って、同一場面の複数の映像を利用しながら、紹介した。

#### 『ハムレット』

- ・“To be or not to be, that is the question.”の独白シーンに絞って、同一場面の複数の映像を利用しながら、紹介した。

#### 『マクベス』

- ・3人の魔女がマクベスとバンコーに予言するシーンに絞って、同一場面の複数の映像を利用しながら、紹介した。

もちろん、シェイクスピアの作品に触れる前にシェイクスピアの簡単な生涯や時代背景などについて紹介している。

### 3 英語教育と文学

教職課程では教科に関する教育内容として、語学に関するものだけでなく、英語文学に関する内容が組み込まれている。しかし、実用英語が大学の英語教育の中にも大きな比重を占めようとしている現在、様々な考察が行われている。

- ・文学を用いない言語教育などあり得ない（斎藤 31）。
- ・確かに異文化理解教育や国際理解教育によって、各地域社会や文化への理解は深まるであろうが、言語的センスを高め磨くばかりでなく、人間に対する大きく深い理解力と、人間の心を深く読み取る洞察力とを養うものは文学であろう。

今やスキル教育に傾斜した英語教育を救う者は文学教育ではなかろうか。なぜなら文学教育によって真のコミュニケーション能力養成の教育が完結すると思われるからである。科学的知見に裏付けられたスキル教育と、人間への豊かな洞察力を育む文学教育は、言語教育の両輪である。（田中 550）

- ・大学英語教育に今必要なのは、一言で言えば、日本の英語教育の長い伝統である教養としての英文学教育を語学教育の重要な支柱として再生させる方向へのパラダイムシフトである。それは、英語を、学校やビジネスで要求される客観情報の授受のための道具として限定するのではなく、人間同士の意思や感情の疎通手段としても学ばせる英語教育、全人的コミュニケーションのための英語教育とでも呼ぶべき英語教育の在り方を志向している（久野 86）。

- ・英語を学ぶことによって、他者の考え、他者の価値観、他者のところに共感することができる能力までも育てることができるような英語力の習得を真剣に目指した大学英語教育を再構築する必要がある。そして、そのための強力な武器となるのが文学であり、文学教育を語学



教育の中に統合することである（久野 86）。

・「豊かな心」を育てることは教育の目的である「人格の完成」に多大な貢献をすることになる。教養として英語教育を考えるのであればこのポイントははずすことはできないだろう（佐々木 a 26）。

西能史「英語教育と文学」（2010 年度活動案内）では大学で英語教育をに携わる者としての現状が紹介されている。10 年程度前のものであるが、現在の状況とさほど変わりはない。

現在、英文学科の学生に自らの専門分野を教える機会に恵まれているが、同時に、様々な学科の学生に一般外国語の英語も教えている。恐らく、大学側としては、一般外国語の授業では、即戦力的な、いわゆる「使える」英語の授業を私に期待しているにちがいないが、明らかに文学偏重の授業を展開している。確かに、同僚の先生方の授業は、TOEIC や TOFEL の準備、グループディスカッション、英会話のような、現代の日本社会が求めている形態が多いように思う。誤解のないように申し上げるが、英会話等の授業を決して批判しているわけではない。嘆くべきは、現代英語教育における軽視なのである。

英語の母国人と話をする際、「文学教育は伝統芸能・文化の継承である」と表現すると、納得してもらえることが多い。能や歌舞伎のような伝統芸能、常滑焼や瀬戸焼のような技の継承が無駄だと唱える人はもはやいないと思うが、英語教育において、英米文学は無用の長物だとのたまう人々が多いと思われる。（西 14）

また、白須康子「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」（2004）では中学校の英語教育を中心としながらも、教材としての文学の有能性について論じているが（白須 97）、その中で文学は人の態度と認識の両方に働きかけるものとして Chambers(1983)を引用している。

#### 4 英語教育とシェイクスピア

教養英語か実用英語かといった議論は、明治という新しい時代を迎えた時から起きている論争である。これに加えて正則英語（英語をネイティブスピーカーから習う）なのか変則英語（英語をノン・ネイティブスピーカーである日本人から習う）といった論争もあった。

大学自体が文学部を廃止し、コミュニケーション系の学部学科、あるいは語学に特化していくような学部学科の設置がさかんに行われている。例えば、関東学院大学国際文化学部教員コラム vol.34(2010.07.29)で英語文化学科の安藤潔で次のように述べている。

英語教育界ではコミュニケーション力が重視されて久しく、シェイクスピアなどやっつけてはだめだという声を時々耳にします。「シェイクスピア」で英米文学一般を意味してもいるようです。確かに400年も前のシェイクスピアの英語はたいそう難しく、それ自体はコミュニケーション力養成に直接は役立たないかもしれませんが。また英語力が不十分なまま難解な英米文学に取り組むことも不可能で、英検2級程度の語学力は必要です。この基本的な英語力の上に英米文学を学べば、さらに広く深い本物の語学力を身につけることもできます。一方文学や哲学自体は、すぐには実用の役に立ちませんが、新聞やニュースだけでは得られない、より広く深い世界を切り拓くもので、生きていく上で思いがけず助けられることがあります。(安藤潔)

英語教育においてシェイクスピアを活用する場合には凡そ次のようなことが想定される。

- 1 文学教育・教養教育としてシェイクスピアを取り上げる。実際の作品を読むというよりはシェイクスピア、シェイクスピアの時代、シェイクスピアの作品の解説を中心に行う。
- 2 語学教育としてシェイクスピアを取り上げる場合には、彼の作品の読解、あるいはラム姉弟の『シェイクスピア物語』を読解する。
- 3 シェイクスピアの原文を読み、作品を読み解く。
- 4 シェイクスピアの名台詞を取り上げ、語学教育として、また、内容的には文学教育・教養教育として活用する。
- 5 英語劇の題材として活用する。この場合には原文をそのまま利用する場合とリライトされた安易なものを使用する場合が想定される。

1 はどちらと云えば、英米文学史や文学を教授する授業科目で扱うことになる。安藤栄子「英語劇を取り入れた授業の効果」(2014)でも次のように述べている。

シェイクスピアの作品は、言うまでもなく人間観察が鋭く、時代を越えて変わらぬ人間性の問題を語っている。学生たちの人生経験はまだ浅く、全てを理解できなくとも、必死で考え、想像し、とりあえずは自分なりの役割を演じてみる。この体験、挑戦は決して時間の無駄ではないはずである。また、シェイクスピアの絶妙な、巧みな言語表現、そして機智はことばの魅力を存分に教えてくれるはずである。

(安藤栄子 47)

文学教育、教養教育において単に作者と作品を暗記させるような内容は愚の骨頂であるが、無知であることは知識基盤がないことになり、リア王の台詞ではないが、“Nothing will come of nothing.” (I.i.90)となってしまう。最低限の知識は必要であろう。文学(演劇)は一種の人生の疑似体験という大きな意味合いもある。従って、文学では「正しいvs間違

っている」を問題にするのではなく、どう感じるのか、何故、そう感じるのかを突き詰めて考えることが重要なのではないだろうか。学生のレポートでもよく見かけるのが「可哀そうだ」「同情する」といった表現だ。ここには「哀れみ」の感情が見て取れるが、何故「哀れみ」を感じるのか、その登場人物の行動は性格によるものなのか、運命・環境によるものなのかによっても考え方は大きく変わる。例えば、ギリシャ悲劇とシェイクスピア悲劇の特徴をここで紹介することで、学生の考え方をまとめる一助になる。

筆者の担当授業「英語文学」「英米文学史」では上記のほかに映像になったシェイクスピアを取り上げている。同一場面を複数の映像を交えて紹介することで、演出面での理解を促している。シェイクスピア劇を実際に観ている学生も少なく、それを補完する意味で行っている。例としては以下の通りである。

#### 『ロミオとジュリエット』

ロバート・ワイズ、ジェローム・ロビンス監督『ウエスト・サイド物語』(1961)

フランコ・ゼッフィレリ監督『ロミオとジュリエット』(1968)

ラーマン監督『ロミオとジュリエット』(アメリカ) (1996)

大谷太郎演出『ロミオとジュリエット～すれちがい』(2008)

#### 『リア王』

アンドリュー・マカラ監督『リア王』(アメリカ、1953)

グリゴリ・コジンチェフ監督『リア王』(ソ連、1970)

黒澤明監督『乱』(日本、フラン、1985)

雨宮望演出『王様の心臓～リア王より～』(TVドラマ、2007)

#### 『ハムレット』

オーレンス・オリヴィエ監督『ハムレット』(イギリス、1948)  
グリゴリ・コジンチェフ監督『ハムレット』(ソ連、1964)  
フランコ・ゼッフィレリ監督『ハムレット』(アメリカ、1990)  
ケネス・ブラナー監督『ハムレット』(イギリス、1996)

### 『マクベス』

オーソン・ウェルズ監督『マクベス』(アメリカ、1948)  
黒澤明監督『蜘蛛巣城』(日本、1957)  
ロマン・ポランスキー監督『マクベス』(ポーランド、1971)

シェイクスピア映画としてよく知っているものや日本人が製作したものを中心に挙げた。筆者がVHS、DVD、Blu-rayのいずれかを所有しているため可能である。大学の授業として取り上げるため、シェイクスピア映画研究で取り上げられているを採用することは言うまでもないが、これ以外に日本人が製作したものの映画やTVドラマも挙げた。TVドラマは現代日本に翻案したものである。また、部分的に蜷川幸雄演出の『NINAGAWA マクベス』、『ハムレット』等の舞台上演を映像化したものも紹介している。同じ場面を複数の映像で見るという機会自体がほとんどないこともあり、理解はより深まったことは言うまでもないことだ。さらに、演出の仕方により印象はもちろんこと、台詞自体の解釈がそこに入って来るとも学生は理解することになる。

2の語学教育としてシェイクスピアの作品を読むことは現在の大学英語教育で最も敬遠されている。筆者も20年ほど前はシェイクスピア作品をリライトされたものを使用していたこともあった。半期で1作品、授業展開にもよるが1年間で2作品くらいは講読できた。しかし、以前は1年間で2単位であったものの、設置基準等の改訂等により半期で2単位の授業が増え、 Semester制度が定着してきたため、半期終了がほとんどになったこともあり、講読の場合には半期で読み切りが必要とな

ってきたことに加え、実用英語重視の考え方から、文学作品を読むこと自体が激減しているのはどの大学でも同じであろう。現在は部分的に取り上げるに過ぎない。

3については英文科のような英文学や英語文学をメインに取り上げる学科での授業ではシェイクスピア原文を取り上げることだ。英語史的に言えば初期近代英語 (Early Modern English) となり、現代英語に慣れている学生が全く読めないというわけではない。16世紀後半から17世紀にかけての日本語を読むよりはるかに読みやすいだろう。英語・英語文学自体を専門的に研究する場合には必要であろうが、シェイクスピアの原文で作品を読むという必要性が実用英語重視の中では薄れている。

4については3を縮小して教養英語として取り上げられる要素が強い内容である。筆者は授業科目「英書講読」、「英書講読1」では英米文学作品の短編や名台詞を取り上げている。訳読中心ではなく、Read Aloudを中心にすすめているが、名台詞は内容を知ることが必要なため、解説を行っている。シェイクスピアや聖書のもを取り上げている。聖書では教会でよく用いられる一節なども取り上げている。

5についてはシェイクスピアの本来の姿である演劇としてのシェイクスピアを実践することだ。すなわち英語劇である。筆者は「日本におけるシェイクスピア原語上演の一考察—大学の原語上演を中心に—」(2013)の中で次のような指摘も行ってきた。

大学におけるシェイクスピア原語上演はシェイクスピア劇上演研究(演劇論)と英語教育の交差点にある。早くからこの分野に視点を向けたのは荒井良雄『シェイクスピア劇上演研究』(1972)である。「日本における原語上演」「大学の原語上演」がすでに取り上げられている。最近では桑山智成「シェイクスピア原語上演が英語学習に与える意義について」(2009)、荒井良雄「シェイクスピアと英語教育」(講演、関東学院大学金沢文庫キャンパス、2011)などがある。シェイクスピ

アと大学教育を考えれば、語学教育として「シェイクスピアの原語読解」、文学として「シェイクスピア作品の解釈」が中心であったが、そこからシェイクスピアを本来の戯曲としてとらえ、英語劇として上演する場合も視野に入ってくる。(佐々木 d 47)

大学でシェイクスピアの原語上演を実際に行っているところがある。しかしこれも2つの流れがある。第1は授業の一環として行われているもの、第2は課外の活動として学生が自主的に行っているものだ。どちらも様々な問題を抱えている。教授者とシナリオの問題がある。単にスキットの延長では不十分であり、英語の指導と演劇の指導ができることが望ましい。

## 5 教授法としての英語劇

シェイクスピアに限らず、英語の授業に劇を取り入れる理由は何であろうか。丹羽佐紀は2つの理由を取り上げている。

- ・様々な国の様々な暮らし、物の考え方、風土、風習、歴史が多様に盛り込まれた各国の名作に触れることは、この目標を達成させるに十分であり、かつ豊かな感性を養うために必要な作業であると考え、筆者にとって、一時的な会話表現の練習や流行りのメディア教材のみでこの目標が達成されるのか、大いに疑問を感じるころである。(丹羽 75)
- ・英語という、全身を使って習得する言語の授業だからこそ、劇の特性を生かせるのではないかと考えたということがある。劇は従来、文学のみならず「音楽・絵画・彫刻・建築・舞踏などを包含している」「一種の総合芸術」と捉えられてきたように、多種多様な形での表現方法が求められる。(丹羽 76)

英語教育でドラマを使用する教授法については伊藤嘉一『英語教授法のすべて』（1994）の中で次のように述べている。

ハワイ大学のリチャード・バイア（Richard A. Via）による教授法なのでバイア・メソッド（Via Method）とも呼ばれる。ドラマ（演劇）を利用して外国語を教える方法である。この方法は従来のドラマ利用の外国語教育とは本質的に異なる。すなわち、従来の方法は外国語教育の中にドラマを導入して、学習効果を高めようとしているのに対し、バイアの方法はドラマそのものを通じて外国語教育を行おうとするものである。その他技術的な面においても従来の方法とかなり違いがある。（伊藤 165-166）

Richard A. Via. *English in Three Acts* (1976)の“Prologue”で次のように述べている。

Overwhelming is not too strong a word to use in this case. Students were *using* English not *learning* English. The observers (the audiences at rehearsals and performances) were surprised that they understood the plays with their limited English. They understood because they saw communication on stage fitting into natural behavior in the proper cultural environment, rather than a recitation. (Via 4)

バイアは劇のことを次のように述べている。

A well-chosen play is a good mode of spoken English. A successful playwright must be able to produce natural speech in



proper context. He is not concerned with the rules and regulations of English, pattern practice, or in illustrating a particular structure, but in expressing ideas and feelings. In most cases the plays use the type of language in use in daily conversation, which is the type of dialogue that your students will find most useful. (Via 5-6)

このバイア・メソッドは極めて高度だ。一般的な英語劇の指導については、佐野正之『英語劇指導マニュアル』（1990）などにも示されているが、教育現場が直面する問題などを踏まえて、安藤栄子「英語劇を取り入れた授業の効果」（2014）では次のようにまとめている。

ドラマ・メソッドは既に小学校教育から大学教育に至まで英語学習に導入され、その役割は大きく、効果をもたらしている。身振り、手振りのジェスチャーや顔の表情を用いて、演技者はお互いにそれらをも理解しながら言葉のやり取りをする。これは真に本物のコミュニケーションだ。だが、現実にこの指導方法が定着しているとは言い難い。たとえば、生徒の多くは「英語」が持つ強勢、リズム、ピッチなどが意味内容に違いをもたらすなどということはほとんど身につけずにきているのではないだろうか。先行研究の中でも時間数や評価の問題、外国人教師や他の教師との協力体制作りなど、様々な課題が挙げられている（安藤 b 43）。

教授法として文法中心から話すことを中心とした教授法は 1922 年から 14 年間、文部省の英語教授顧問として来日していたハロルド・E・パーマー（Harold E. Palmer, 1877-1949）のオーラル・メソッドが有名である。日本のオーラル・メソッドの受容については有田佳代子「パーマーのオーラル・メソッド受容についての一考察—『実用』の語学教育をめ

ぐって」(2009)が詳しい(有田 27-39)。飛田勸文は日本の英語劇の歴史を第1期(1930～1970)、第2期(1970～2000)、第3期(2000～現在)に分けている(飛田 110)。

第1期(1930～1970)、英語教師は、「英語で考える」という目的のもと、主に児童中心主義教育の哲学とハロルド・E・パーマーのオーラウ・メソッドを土台にして英語劇の実践を展開した。第2期(1970～2000)、英語教師は、「表現・コミュニケーション」という目的のもと、主にコミュニカティブ・ランゲージ・ティーチングを土台にして英語劇の実践を展開した。第3期(2000～現在)、英語劇を活用する英語教師の間に共通する哲学や理論といったものは見られないが、彼らは、異文化・国際理解、多文化共生、グローバル人材などを目的として英語劇の実践を展開している(飛田 110)。

英語劇を教授法に導入した場合、単に授業中で発表するものなのか、観客を想定し、プレゼンテーションとして、観せることを視野に入れて、衣装や舞台、音楽まで整え、いわゆる「上演」として質の高いものを目指すかによって指導の在り方や指導者の在り方も大いに変わってくるだろう。プレゼンテーションというよりはパフォーマンスとするかでその質は大きく変わるだろう。すなわち、指導者自身も演劇の素養を問われることになる。本格化すればするほど、教員側の負担も大きくなるのだ。

## 6 英語におけるシェイクスピア劇上演

大学教育における英語劇は中学・高等学校の内容をさらに深めることとなる。筆者はシェイクスピア劇原語上演及び大学生のシェイクスピア劇上演について「シェイクスピア劇原語上演史」(佐々木 b)、「麗澤大学のシェイクスピア劇原語上演」(佐々木 c)、「日本におけるシェイクスピ

ア原語上演の一考察—大学の原語上演を中心に—(佐々木 d) で取り上げきた。

シェイクスピア劇原語上演史の歴史を見ると、1869年にレイノーとベニー一座による『ロミオとジュリエット』を英語での上演、1912年に東京アマチュアドラマチック倶楽部による『ロミオとジュリエット』などがある。これらは外国人によるものだ。では日本人による原語上演史はどうであろうか。1907年には荒川重秀・沢村宗之助主宰の洋劇研究会による『ジュリアス・シーザー』、1915年に『ベニスの商人』がある。

英語劇の歴史をたどってみると 1882年には日本人初の女子留学生の山川(大山)捨松が「英語演劇クラブ」を創設(飛田 112)したという留学生の中には津田梅子もいた。山川と英語演劇には以下のような逸話があったという。

同じ留学生だった永井繁子とともに結成した「英語演劇クラブ」が捨松の人生を変えることとなります。繁子の結婚式で演劇クラブの一員としてシェイクスピアを演じていた捨松は、そこで1人の男性の見初められました。それが捨松の夫となる大山巖です。シェイクスピアを演じる捨松を見て、先妻に先立たれた大山巖は捨松を後妻にと望んだのでした。薩摩藩出身の大山との結婚は、会津で戦った捨松の家族にとっては認めがたいものでしたが、捨松はこの縁談を受け入れます。大山の妻として活動することで、女性が活躍できない世の中を変えられるのではないかと考えたからです。(「大山捨松」鹿鳴館の貴婦人と呼ばれた女性のバイタリティ溢れる生涯)

大山捨松(1860-1919)は政府の重鎮である大山巖(1842-1916)の妻となり、その後鹿鳴館でのパーティなどで活躍した人物である。

大学生におけるシェイクスピア劇原語上演の先駆者は1935年の日本女子大学文学英文科によるシェイクスピア劇である。1901年の開校時に

は坪内逍遙（1859-1935）が『リア王』を講義し、逍遙に師事し、地球座、近代劇場を結成した加藤長治（1900-1973）が演出を担当、他にも満田健児（三津田健）（1902-1997）、遠山静雄（1895-1986）、岩崎民平（1892-1971）も指導に当たっていた。演劇人が直接指導していたのである（佐々木 d）。英語劇というだけではなく、演劇的にもプロが指導士という点は突出している。なお、英語劇が上演されたということだけで注目すれば、西南学院大学の前身である西南学院高等部 ESS が 1924 年に『マクベス』を上演した記録がある。（佐々木 d 46）筆者は大学におけるシェイクスピア原語上演について以下のように指摘した。

日本におけるシェイクスピア劇原語上演は上演史と英語教育という観点からみると、大学のシェイクスピア劇原語上演では日本女子大学が先駆的な役割を果たしていることがわかる。これまでのシェイクスピア劇上演史で日本初上演のものもそこには含まれることとなり、さらに、英語教育という観点から見れば、最近の実用英語重視の教育内容とは異なった成果がそこには見られることとなった。しかも日本女子大学の場合には、女子のみで上演するという側面もあり、上演史的にも、また教育的にも改めて評価されるべきものではないだろうか。今後は現在も原語上演を続けている麗澤大学、関東学院大学、同志社女子大学、甲南女子大学についても調査・研究を進めていきたい。いずれも大学が組織的に取り組んでいたり、教育課程との連動という立場をとっており、大学教育として原語シェイクスピア劇上演に取り組んでいること、そして指導者の存在が継続的な上演を実現させている大きな原動力である。教育を継続的に進めるには組織と指導者に負うところが大きい。（佐々木 d 47-48）

また、筆者は「原語シェイクスピア劇上演年表（大学編）」（佐々木 d 50-68）において 1935 年から 2012 年までの記録をまとめている。なお、

現在、英語劇を継続的に上演している大学としては、関東学院シェイクスピア英語劇、同志社女子大学シェイクスピア・プロダクション、麗澤大学英語劇グループ、甲南女子大学シェイクスピア劇、上智大学のソフィア・シェイクスピア・カンパニーなどがある。

## 7 筆者が体験した指導者としての英語劇

筆者もかつて短大の専任教員時代に課外の活動として英語劇に取り組んだ経験がある。短大の大学祭や学院の創立記念として英語劇を披露した。短大ということから、出演者はすべて女子学生である。*The Merchant of Venice* は学院の創立 70 周年記念のいわゆる出し物のひとつとして、幼稚園、中学校、高等学校、短期大学の園児・生徒・学生をはじめ、関係する教職員、保護者、招待者などを含め 1000 人以上の観客の前で披露することとなった。これ以外は大学のイベントとして実施され、イベントは対抗形式となり、最優秀のものに学長賞が授与されるというものであった。

1992 年 10 月 *The Merchant of Venice*. 両国国技館

※ 3 つの箱選びの場面

1993 年 10 月 *King Lear*. 武蔵野短期大学野外ステージ

※ 冒頭のリア王が 3 人の娘に財産分与をする場面

1994 年 10 月 *Julius Caesar*. 武蔵野短期大学野外ステージ

※ ブルータスとアントニーの演説の場面

1995 年 10 月 *Macbeth*. 武蔵野短期大学高橋記念講堂

※ 3 人の登場とマルカムとマクベスの戦いの場面

1996 年 10 月 *Romeo and Juliet*. 武蔵野短期大学高橋記念講堂

※ 舞踏会とバルコニーの場面

1997 年 10 月 *Hamlet*. 武蔵野短期大学高橋記念講堂

## ※独白の場面とハムレットとレアティーズの試合の場面

上演は以上の通りである。この時の教員4名と学生の役割等は以下の通りである。

筆者 総責任者。脚本（台詞は英語、照明、音響指示含む）、演出。

舞台監督・衣装・美術兼任。

他の日本人教員 舞台の大道具製作の監督。

ネイティブ教員 2名により台詞の指導。発音、イントネーション。

Aグループ学生 台詞のある出演学生約10名前後。

Bグループ学生 台詞のない出演学生約30名前後。大道具の製作。

Cグループ学生 音響、照明、緞帳・中幕を担当する学生約6名。

（大道具の製作補助を兼ねる）

10月に上演していたことからおもなスケジュールは以下のように進めていた。

- 4月～6月 脚本作成とキャスティング
- 5月～7月 衣装の手配
- 7月 全体の顔合わせと分担の確認
- 6月以降 Aグループ学生の台詞合わせ開始
- 9月以降 Bグループ学生の動きの確認開始
- 9月以降 Bグループ学生の大道具製作開始
- 9月以降 Aグループ学生の台詞と動きの確認開始
- 9月中旬 Aグループ、Bグループを入れての稽古開始
- 9月下旬 Cグループ学生のタイミングの稽古開始
- 10月初旬 全体リハーサル

英語劇を導入したのは国際教養学科の特性を生かせないかという大学

側の強い意向のもとに行われた。筆者は劇団員、役者としての経験はなかったが、学生時代に舞台関係の放送設備、照明設備を操作には経験が豊かであったこと、学内のテレビ放送番組の製作、バンド活動などを行っていた。その為研究ではシェイクスピア中心に行っていたが、いわゆる本文研究ではなく、演出論、演劇論、文学作品の劇化、映画化、ミュージカル化などの舞台や映画といった総合芸術、映像論なども行っていた。これに加えて、シェイクスピア関連の上演や映画なども頻りに観劇し、時には劇団の稽古場に入入りし、上演後には演出家や役者と反省会などを行い、演劇の現場も体験してきた経緯がある。

実際に英語劇の製作では約 30 分という制約があり、いわゆる名場面を抜き取った内容となり、解説役として前口上だけは日本語と英語を新たに加えた。授業ではなく課外のイベント用の英語劇ということから以下のことを念頭に入れた。

- 1 台詞の有無に関わらず、できるだけ 40 人前後は出演させる。
- 2 台詞のある配役は原則、英検準 2 級以上取得の学生で構成した。
- 3 学生に達成感が味わえるような工夫をする。
- 4 演劇経験者なしの学生でも分かり易くできるように、グループごとによる稽古を増やす。
- 5 英語の指導は 2 段階に分け、英語の台詞を覚え、簡単な読み合わせまでは筆者が担当する。
- 6 上記 4 以上の発音やイントネーションはネイティブ教員が担当する。
- 7 上記 5 がある程度の段階に来たら、動きを入れて調整しながら進める。
- 8 稽古の様子をビデオ撮影し、自分たちの姿を客観的に観ることによって自助努力できる機会を設ける。

特に上記の5～7はかなり有効で、6・7では日本人教員、ネイティブ教員、学生が意見を出しながら、タイミングや動作について確認しながら、必要に応じて変更しながら本番を迎えた。今で言えば、協働作業、アクティブラーニングそのものである。

台詞としての英語の発音やアクセントも、当然のことながら場面による演出方法や登場人物の心境により変わってくる。このような時にはネイティブ教員の指導はネイティブの感性が最大限に生かされることになる。ひとつのものを作り上げるプロセスに教育的な効果がある。

短大ということから、1年で経験した学生が2年目も積極的に参画する学生もあり、年々クオリティも高まったが、6年間で幕を下ろした。当然のことながら、学生には英語力向上だけでなく、表現力をはじめ、協働作業という面でも大きなプラスになったことは言うまでもないことだ。こうした大掛かりなイベントやエンターテイメントを行うには教員側の負担は大きくなることや演出等を担当する教員はある程度舞台関係の素地がなければ、指導に当たることは難しい。日本人教員もネイティブ教員との協働作業となり、学生は学生同士、教員との協働作業という面がある。また、主演や主要キャストを演じた学生の中にはフライトアテンダントとして就職したものもいる。

## エピローグ

シェイクスピアを教材として利用する最大の利点は、英語劇を上演することだろう。シェイクスピア作品は演劇である以上、読むのではなく、演じられて初めてその真価を発揮する。しかし、実際には授業で上演まで発展させることは困難だ。しかし、原文そのままにしろ、多少リライトされたものであろうと、シェイクスピアは誰もが知っているブランドという強みがある。シェイクスピアが世界中で読まれている、知られていることは国境、文化、言語の違いを越えている存在である。



筆者はかつてベン・ジョンソン(Ben Jonson, 1572-1637)のあの有名なフレーズを引用して以下のように述べてことがある。

**He [Shakespeare] was not of an age, but for all time!**

私は少し言い方を変えて次のようにも考えています。

**He [Shakespeare] was not of a culture, but for all cultures.**

あるいは、

**He [Shakespeare] is not of a culture, but for all cultures.**

と、言ってもよいかもしれません。(佐々木 e 20)

最近ではディプロマポリシー (diploma policy 卒業認定・学位授与の方針) 等と授業科目の到達目標との関連性も求められている。筆者は国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科の専任教員として「英語文学」や「英米文学史」といった専門科目を担当しているが、学部・学科との関連性からシェイクスピアを取り上げることはふさわしいと考えている。筆者も短大の専任教員時代に英文学概論でシェイクスピアを取り上げた際に『マクベス』を取り扱い、日本の『マクベス』として黒澤明監督『蜘蛛巣城』(1957)を映像を交えて紹介したことがある。その時授業を受けていた短大の卒業生が大学の3年次編入をしたが、四大の編入先でもシェイクスピアの授業で同様のことがあり、黒澤明監督『蜘蛛巣城』(1957)については知っていることをその授業の担当者に話した時に驚かれたことがあったという。筆者としてはシェイクスピア作品では『十二夜』など上演した時の演出の面白さを扱いところであるが、シェイクスピアと言えば誰もが知っている作品や台詞を取り上げ、そこから掘り下げていくことが真の教養となると考えている。

テキスト

Alexander, Peter, editor (1992). *The Complete Works of Shakespeare*. Collins.

### 引証資料

有田佳代子(2009).「パーマーのオーラル・メソッド受容についての一考察—『実用』の語学教育をめぐって」、『一橋大学留学生センター紀要』、第12巻、一橋大学。

安藤潔(2010).「シェイクスピアの楽しみ<前編>」、<http://kokusai.kanto-gakuin.ac.jp/column/column-265/>、2016年1月16日アクセス。

安藤栄子(2014).「英語劇を取り入れた授業の効果」、『国際関係研究』、第35巻第1号、日本大学国際関係学部国際関係研究所。

伊藤嘉一(1994).『英語教授法のすべて』、大修館書店。

「『大山捨松』鹿鳴館の貴婦人と呼ばれた女性のバイタリティ溢れる生涯」(2018). <https://sengoku-jidai-kassen.com/other/20180102/>、2020年2月27日アクセス。

久野寛之(2007).「大学における英語教育改革その1—英文学の新しい位置付け」、『北海道文教大学論集』、第8号、北海道文教大学外国語学部英米語コミュニケーション学科。

斎藤兆史(2004).「文学を読まずして何が英語教育か」、『英語教育』、第53巻第4号、大修館書店。

佐々木隆 a(2011).『英語教育の行方』、イーコン。

佐々木隆 b(2013).「シェイクスピア劇原語上演史」、荒井良雄編、『シェイクスピア名セリフ集』、朝日出版社。

佐々木隆 c(2013).「麗澤大学のシェイクスピア劇原語上演」、荒井良雄編、『シェイクスピア名セリフ集』、朝日出版社。

佐々木隆 d(2013).「日本におけるシェイクスピア原語上演の一考察—大学の原語上演を中心に—」、『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第6

輯、武蔵野学院大学。

佐々木隆 e (2016). 『日本の沙翁劇・英国のシェイクスピア劇—受容を通してみる日本文化—』、阿佐ヶ谷ワークショップ講演録、武蔵野学院大学佐々木隆研究室。

佐々木隆 f(2017). 「教育実践例 教材に関する学生の反応と指導—英米文学史—」、『武蔵野教育研究』、第 3 巻第 10 号、武蔵野教育研究会。

佐々木隆 g(2017). 「『英語文学』に関する一考察—実践例と今後の展開—」、『武蔵野教育研究』、第 3 巻第 14 号、武蔵野教育研究会。

佐々木隆 h(2019). 「『英語文学』の授業展開—考察—『ロミオとジュリエット』を事例として—」、『新教育課程研究』、第 9 号、武蔵野教育研究会。

佐々木隆 i(2019). 「『英語文学』の授業展開—考察—『リア王』を事例として—」、『新教育課程研究』、第 10 号、武蔵野教育研究会。

佐々木隆 j(2019). 教科書『英語文学～英米文学を中心に～』配信。

佐々木隆 k(2020). 「『英語文学』の授業展開—考察—『ハムレット』を事例として—」、『新教育課程研究』、第 14 号、武蔵野教育研究会。

佐々木隆 l(2020). 「『英語文学』の授業展開—考察—『マクベス』を事例として—」、『新教育課程研究』、第 15 号、武蔵野教育研究会。

白須康子(2004). 「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」、『人文研究』、第 154 号、神奈川大学人文学会誌。

シラバス「英語文学」(2019). Musashino Academic Station, [tal-k.musashino.ac.jp/Kyoin/web/Syllabus/WebSyllabusSansho/UI/WSL\\_SyllabusSansho.aspx?P1=02101760&P2=2019&P3=20191215](http://tal-k.musashino.ac.jp/Kyoin/web/Syllabus/WebSyllabusSansho/UI/WSL_SyllabusSansho.aspx?P1=02101760&P2=2019&P3=20191215)、2020 年 1 月 1 日アクセス。

総合教育政策局教育人材政策課教員免許企画室教職課程認定係。「②外国語(英語)コアカリキュラム対応表」、[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kyoin/080718\\_1.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoin/080718_1.htm), access on 2020.01.04.

田中慎也 (2004). 「大学の英語教育改革は英文学教育を蘇生させる?」、

- 『英語青年』、第 150 巻第 9 号、研究社。
- 西能史（発行年月日記載なし）。「英語教育と文学」、『ルネッサンスニュース』、2010 年度活動案内、第 29 号、ルネッサンス研究所。
- 丹羽佐紀（2012）。「劇を取り入れた英語授業の試みについての一考察：効果と課題を探る」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』、第 22 巻、鹿児島大学教育学部。
- 飛田勘文(2017)。「日本の英語劇の歴史—第 1 期・第 2 期—」、  
『清泉女子大学人文科学研究紀要』、第 38 号、清泉女子大学人文科学研究所。
- 福澤諭吉（1959）.『福翁自傳』、慶應義塾、『福澤諭吉全集』、第 7 巻、岩波書店。
- Cambridge Dictionary. <https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/literature>. access on 20200104.
- Chambers, Aidan(1983). *Introducing Books to Children*. Horn Book. 2nd editon.
- Stringer, Stringer, editor (1996). *The Oxford Companion to Twentieth-Century Literature in English*. Oxford University Press.
- Via, Richard A. (1976). *English in Three Acts*. The University Press of Hawaii.

【キーワード】英語教育、英語文学、シェイクスピア、教授法、英語劇

執筆者一覧

佐々木 隆 武蔵野学院大学教授

新教育課程研究 第16号

2020年5月30日 発行

武蔵野教育研究会 編集・発行

〒350-1328

埼玉県狭山市広瀬台3丁目26番1号

武蔵野教育研究会事務局

武蔵野学院大学 佐々木隆研究室

*Studies on New Curriculum*

Number 16

30 May, 2020

The Society of Musashino Education Studies